

構える筆法で、天来はこれを「俯仰法」と名付け、古典はこの用筆法で書かれたと考えて「古法」とも呼んだ。この発見が書道界に大きな影響を及ぼし、これが近代書芸術の基礎となり、戦後から現代までのさまざまな潮流を生み出したのである。天来が現代書道の父と呼ばれる理由の一つがここにある。

### ●育ててくれた故郷に恩返し

佐久地方の愛好家たち百余人が集まり、天来の書を順番に購入して財政的にも支援しようと、屏風百双会を作っていた。一九一七（大正6）年、郷里の母校協和小学校が火災に遭い、天来はこの百双会の揮毫料のうち千円を校舎再建の費用として寄付した。

一九一九（大正8）年、書研究と書道研修の場として「書学院」の建設を思い立ち、「書学院建設趣旨書」を発表、この賛同署名には犬養毅、松方正義、嘉納治五郎など、当時の著名な人たちが名を連ねた。

### ●「学書筆跡」刊行と書学院の建設

一九二二（大正10）年、古典の臨書集「学書筆跡」全二〇巻（うち三巻は小琴の「かな」）を刊行。天来が発見した用筆法を用いての臨書で、大きな反響を呼んだ。一九二六（大正15）年、天来は台湾・朝鮮を訪れたが、朝鮮には優れた作品が多々あることに驚き、李王家の宝蔵まで調査して、一九三一（昭和6）年「朝鮮書道菁華」全五巻を発刊した。

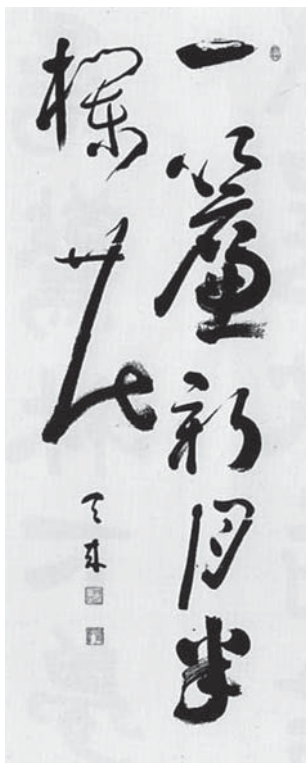
一九三〇（昭和5）年、東京渋谷区代々木に「書学院」が完成した。ここには若き書家たちが集い、上田桑鳩・桑原翠邦・金子鷗亭・手島右卿ら、戦後の書道界を背負う人たちが育った。一九三二（昭和7）年、東京美術学校（現東京芸術大学）師範科・習字科の講師となる。一九三六（昭和11）年、鎌倉にも書学院を完成させたが、この工事は大工をはじめほとんどの職人を郷里協和村から呼び、郷里とのつながりをさらに深めた。



佐久市立天来記念館外観



天来生家の裏山に造られた天来自然公園



一簾新月欄花（すだれ越しには月が見え、手すりの下には花がある）この書を刻石した碑が天来自然公園に建っている。比田井昭三氏所蔵

一九三七（昭和12）年、「大日本書道院」を創立して、総務長になった。この年に制定された帝国芸術院会員に書家として推挙された。晩年は漢字整理事業に情熱を注いだ。これは未完に終わった。一九三九（昭和14）年一月逝去。郷土に支えられ、また郷土を支えた書家であ

り、書研究者であった。

地元や門流の人たちの尽力で、一九七五（昭和50）年に天来記念館（現佐久市立）が建てられ、また二〇〇六（平成18）年、天来生家の裏山に天来自然公園（NPO法人未来工房もちづき経営）が造られ、今も多くの人が訪れている。

（吉川徹）

#### 参考文献

- 『近代書道開拓者 比田井天来・小琴』 比田井天来・小琴刊行会
- 比田井天来 『書の伝統と創造 天来翁書話抄』 雄山閣出版
- 『生誕一三〇年現代書道の父比田井天来』 『墨』 一五九号特別企画 芸術出版社
- 比田井和子 『現代書道の父 比田井天来』 天来書院
- 肖像写真 『現代書道の父 比田井天来』（天来書院刊）より

## 佐久の先人たち⑨

### 現代書道の基礎を築いた書家

ひだいてんらい  
**比田井天来**

(1872~1939年)



書の研究を深めた天来は、中国古典ようひつの用筆法を発見して書道界に大きな影響をもたらし、ここから現代書道の新しい潮流が生まれた。書家として初めて芸術院会員となった天来、また故郷をこよなく愛した人であった。

#### ●貞祥寺住職のすすめ

比田井天来は一八七二(明治5)年、北佐久郡協和村片倉(現佐久市協和)に、比田井清右衛門、コトの三男として生まれた。生家は江戸期から名主を長くつとめ、天来の幼少期には製糸業を営んでおり、近年まで醤油の醸造を家業としていた。

天来は幼名を常太郎といい、一八八七(明治20)年協和小学校温習科を卒業し、五郎兵衛新田村(現佐久市甲)出身の漢学者依田稼堂かどうが野沢町(現佐久市野沢)に開いていた有鄰塾ゆうりんという学校で漢学を学んだ。



天来は晩年、さまざまな用筆法で自在に書き、最後まで新しい書を求めていた。

『現代書道の父 比田井天来』(天来書院刊)より

天来は元子に小琴という雅号を贈り、天来のもとで勉強を重ねた小琴は、のちに「かな書道」の大家となった。

一八九七(明治30)年、前山村(現佐久市前山)にある貞祥寺を訪れた時、住職の薦め「知足軒」という文字を書いたところ、住職に「君は書家になれる。東京へ修行に出なさい」と言われ、これがきっかけで上京し、小石川哲学館で哲学と漢学を修め、書を日下部鳴鶴なぐさに学んだ。鳴鶴は自分が書いた手本を学ばせるのではなく、広く古典から直接習うよう指導したが、この学び方は天来が生涯用いた学習法になった。一九〇〇(明治33)年、二九歳で常太郎を鴻と改名し、翌年鎌倉円覚寺で禅を修めた。天来という号もこのころから使い始めている。天来が父と上京した時泊まっていたのは日本橋蛸殻町にあつた小さな旅館で、天来はこの宿の一人娘元子と結婚した。

#### ●古典的用筆法を発見

一九一五(大正4)年、東京高等師範学校(現筑波大学)の習字科講師嘱託となり、文部省検定委員を委嘱された。天来は、文部省の検定に古典臨書と鑑識を初めて取り入れた。明治以降書壇では、やわらかい羊毛筆を垂直に立てて書く「迴腕法」という技法が流行していた。師であった日下部鳴鶴もこの技法であった。しかし、最も美しい楷書が書かれたといわれる中国唐時代の線は、この迴腕法では書けないのではないかと考え、天来は新しい筆法の研究を始めた。

一九一六(大正5)年から二年余り、天来は家族と別居して、鎌倉建長寺に住んで古典の研究に没頭し、新しい用筆法を発見した。剛毛筆を使い、筆を斜めに



63歳頃の作品。中国の古典に習って天来が作り出した「木簡隸」という書体。『現代書道の父 比田井天来』(天来書院刊)より

鳥驚林下夢  
風展枕前書  
掃石雲随帚  
耕山鳥傍人